花山だより（七月）

天文臺には二匹の飼犬が居る．大きい方を「クロ」，少さい方を「シロ」と云ふ．蓋し，毛並の黑白を以つて其の名前を附せるが如し．所が去る七月二日の午の刻，此の少さい方の「シロ」が，何を思つてかフラ〳〵と山を下り，蹴上迄行つたは良いが，京津國道を疾走する1929年型フォードのボロ自動車と，アッと云ふ間もあらばこそ，ドカンとブッツかつて，クラ〳〵と目が眩らみ，ドタンとヒックリ返つて，其まゝ犬死にしました．此れは一大事と早速遺骸を蜜柑箱にブチ込んで，山へ歸へり，林の中に穴を掘つて，いと鄭重に葬りました．それから，山の諸先生一同御參列の上，嚴かなる御葬式を營み一同深く頭を垂れて，南無阿彌陀佛を唱へて，南無妙法連華經と返し，高マノ原を唸つて，讃美歌を合唱し，最後に一同送葬曲を奏でました．「天文臺葬」です．東鄕元帥の國葬もかくやと偲ばれて，轉た感懷に堪へなかつたです．もつとも，中には何も念佛を唱へなかつた人もありました．無宗教の仁にして，「生は卽ち生くる事なり．死は卽ち死る事なり，星は卽ち太陽に異ならず」なんて，威張つて居る奴は，たゞムニヤムニヤと云ひました．もつとヒドいのは，遙かに空を仰いでは「イヽ天氣やナアー」と云ひました．だからイケないのです．畜生と云へども靈魂は不滅，犬罰テキ面にきいて，七月六日の早朝花山定期バスは「シロ」往生の名所，「蹴上」にて，1929年型ボロタキシーと正面衝突をなし，搭乘者五名，重輕傷を負ひました．重傷者は唇を切り，傷持つ身の如何ともなし難く，半日天文臺で寢て居ました．越えて七月十二日，又もや定期バスは，國道花山道路入口にて，京阪大型バスに追突され，膽玉が飛び上りました．幸ひ怪俄人はありませんでしたが，天文臺バスはボディーをツブされて，損害十五圓を蒙りました．其他，七月上旬には，彗星搜索望遠鏡のハンドルが破損したり，時計室の水銀保溫寒暖計が故障を起したりして，犬罰と云へども馬鹿にならず，犬が馬や鹿になつてはたまらんと云ふ事がハツキリ解かりました．讀者諸子よ，夢々犬を，粗ろそかにし給ふな．私は，毎夜，大犬星座と小犬星座とそれから獵犬星座とを拜んで居ます．

近畿防空演習下に於ける花山——稻葉先生は，去る七月十五日より三週間の豫定で，廣島電信隊に召集されましたので，七月十日付辭令で，花山天文臺防空司令官には，公文工兵少尉殿が任官されました．七月二十六日の演習

第一日には，朝より，花山防護團の活躍目ざましく，暗雲低く垂れて今にも雨が降りさうなのに拘らず，大ドームのスリットを，十三ミリメートル程開けて，大望遠鏡を振り廻し，懸命に敵機を捜し求めましたが，不幸，何物をも發見出來ず，たゞ見える物は，雨雲の水滴とレンズの塵とのみでした．勿論，敵機を發見しても其れ迄で，如何とも爲す能はず，天文臺には高射砲は申すに及ばず，一臺の機關銃すらなく，テニスのボールが三個と野球のボールが二個あるのみである．敵機が來れば，たゞ指を喰へて眺めて居るか，せいぜい「馬鹿野郎」とドナる位が關の山です．此れを察してか，さすがに敵もさるもの，二十六日の十五時頃，遙か西方に一點機影を現はした敵の輕爆機，見る々々中に高度を下げ，千百米—千米—八百米—六百米と下降したかと思ふと，急に清水山の西方に於いて，突如，發動機をピタリと止め，そのまゝ稚兒ヶ池を飛び越えて天文臺へ突入して來た．スハ！一大事と思ふ間もなく，大ドームの上空僅か五十米の點をかすめて，徐ろに旋回せず，突如，天文臺の玄關口に多量の灰を撒き散らしました．多分皆んな「ワア！」と云ひました．急に發動機の音がして，誰かゞ「馬鹿野郎」と云つた時には，敵輕爆機は，遙か東方の大津の上空に飛び去つた後でした．其夜は惡憎の雨で，敵機は愚ろか，大事な月蝕さへも見えませんでした．演習第二日，七月二十七日夜の燈火管制．天文臺は全部消燈．たゞ本館西入口の內部廊下と宿舍の食堂とだけに，黑布に覆はれた電燈が，かすかに，ついて居ます．大ドームのテツペンに上ると京都の北部，西部，南部大阪方面及び山科全部の燈火管制振りがよく觀察出來ます．さすがに京都は立派な管制振りで，花山の防空司令官も，いと滿足に思ひましたが，たゞ一つ，山科方面にある某大工場（特に名を祕す）の消燈が，いさゝか遲い．工場は自らサイレンを鳴らし自ら消燈するので大變都合は好いが，それだけ山から見て氣にかゝる．かゝる所は，自ら進んで一足先に消燈すべきだと思ふ．BK アナウンサーを眞似て「若し日本を愛する心が有るならば，其の火を消して下さい」と呼びましたが，惜しくも，半分程叫んだ時に，工場の燈が消えてしまつたので，返す返すも殘念でした．ともかく，花山に高射砲一臺機關銃二臺あれば，舊京都市內には東より敵機を入れない自信があると，皆んな云つて居ましたつけ．（花山子）